

「上高地も尾瀬も知らないなんて、若いとき、何をしていたんですか？」という、ある方の素朴な質問がきっかけで、わたしたち夫婦は、5年前からほぼ毎年、上高地を訪れるようになった。その、ある方のガイドで、今まで大正池、田代池、明神、徳沢、徳本、横尾を訪れ、そして今年はずいぶん涸沢(からさわ)まで行こうということになった。下調べをしてみると、かなりの雪渓を越えなくてはならない。

はたして、行き着けるだろうか？ 旧友ふたりをさそい、5人のパーティで、わたしたちは朝5時に山中湖を出発した。さいわい天候にめぐまれ、12時間後の午後5時には、雪渓の中、すでに涸沢ヒュッテを間近に見上げていた。

そして、その40分後に全員無事チェックインできた達成感は、とうてい一言では表現しつくせない。険しさにぐるっと囲まれた壮観なカール、ヒュッテで働く人々の雪焼けした顔、ヒュッテの屋上にある青空喫茶店、真夜中の満天の星、翌朝のご来光、朝日に輝く奥穂高や前穂高の氷壁、なにもかもが初体験で、海外よりもっと遠くへ来た気がした。

穂高は山ではなく、これは壁だと思った。登りきるか、滑落してしまうかの二つの道しかない危険極まる真白い壁に、わずかに動く登山者の黒い点、点。標高2300メートルのはりつめた空気の中、富士山麓とはまったく質の異なる山々がそこにあった。

高校時代に、あの「氷壁」を読んでいたにもかかわらず、氷壁そのものの実際の勾配と冷気がわかっていなかった。壁にいとむ山男たちの深層にも、うとかった。

青年期に、こういう生死の境界線に出逢った者たちのその後の人生・死生観が、わたしのように還暦間近で出逢った者のそれとは、一味も二味も異なるのは当然だろう。

彼らはその後、何をめざし、そして今、どういう人生をおくっているのか？ そのことを巡らせながら、沢にかかる吊り橋をいくつも渡り、天空からゆっくりと下界におりた。